

# 未来の当事者たちへ — 商いの原点となる『論語と算盤』 —

(株)日本設備工業新聞社  
代表取締役社長 高倉克也



渋沢栄一

新年の最初に見る夢が初夢と一般的にいられています。いわゆる一富士・二鷹・三茄子など初夢によってその年の縁起を占う風習も存在します。読者の皆さま

まはよい夢を見られたでしょうか。

夢で連想するのは「日本資本主義の父」と呼ばれた渋沢栄一の夢七訓です。渋沢は意識的に夢を見ること、すなわち夢想すること、理想的な夢を描くことの大切さを唱えました。

夢なき者は理想なし  
理想なき者は信念なし  
信念なき者は計画なし  
計画なき者は実行なし  
実行なき者は成果なし  
成果なき者は幸福なし  
ゆえに幸福を求める者は夢なかるべからず

夢を起点として理想→信念→計画→実行→成果→幸福という一連のプロセスが成立すると明快に述べています。逆にいうと夢がなければ何も生まれないということでしょう。生涯に約500もの企業の設立にかかわった渋沢は絶えず夢見る人だったのかもしれない。

## おのれを修め人に交わる教え

江戸時代後期の天保11年(1840)、渋沢は現在の埼玉県深谷市で養蚕、金融、染料の製造・販売なども手がける豪農の家に生まれました。最後の将軍・徳川慶喜の家臣となり、ヨーロッパに派遣されて近代的な市場経済に開眼します。明治維新後は大蔵省の官吏を経て実業家に転身し、資本主義の基底となる株式会社や銀行の設立に奔走しました。

幼い頃から教育熱心な父や従兄弟の漢学者から学問の手ほどきを受けた渋沢が生涯にわたる経営の指針としたのが中国の『論語』です。孔子と高弟たちの言行を綴った『論語』は『孟子』、『大学』、『中庸』と共に儒教における四書のひとつとされています。

事業を始めるにあたって渋沢は『論語』の教訓をみずからの拠りどころにしようと考えました。1916年に発刊された『論語と算盤』で「論語にはおのれを修め人に交わる日常の教えが説いてある。論語は最も欠点の少ない教訓であるが、この論語で商売はできまいかと考えた。そして私は論語の教訓に従って商売し、利殖を図ることができると考えたのである」(角川ソフィア文庫版)と述懐しています。

論語は道徳、算盤は商売の象徴です。資本主義

の生成期に際して渋沢は何よりも商いに道徳が欠かせないことを力説しました。「ぜひ一つ守らなければならぬことは、商業道徳である。約すれば信の一字」と。

## 持続可能な企業の条件

ノンフィクション作家の佐野真一は渋沢の生涯を追った『渋沢家三代』で「栄一が我が国に健全な資本主義を根付かせようと決意してから約120年、日本の資本主義は栄一をしてそういわしめるに違いないと思えるほどに頹廢、墮落してしまった」と警鐘を鳴らしています。経済と道徳の統一を唱えた渋沢はたしかに現在のコンプライアンス(法令順守)やCSR(企業の社会的責任)の先駆者といっているでしょう。

とはいえ渋沢は単なる商業道徳の説教をするために論語を持ち出したわけではありません。いわゆる経済道徳合一説には商いの原点となる普遍的な意味があるとわたしは思います。

利益の追求について渋沢は「富をなす根源は何かといえば仁義道徳。正しい道理の富でなければ、その富は完全に永続することはできぬ」、「真正の利殖は仁義道徳に基づかなければ決して永続するものではない」と断言しています。ここにおけるキーワードは<永続>という言葉です。道理なき利益の追求は一時的に実を結んだとしても決して永続することできないと戒めているのです。

企業の命運も道理の有無によって決定的に左右されます。渋沢は「道理に伴って事をなす者は必ず栄え、道理に悖って事を計る者は必ず亡ぶることと思う。一時の成敗は長い人生、価値の多い生涯における泡沫のごときものである」と企業存続の要諦を説いています。いわば<持続可能な企業>の条件を明らかにしたといっているでしょう。

それでは時代を超えて存続する企業の道理とはいったい何でしょうか。渋沢は「信の威力」をもっとも重視しています。「信の威力を宣揚し、わが商業家のすべてをして、信は万事の本にして、一信よく万事に適する力のあることを理解せしめ、もって経済界の根幹を堅固にするは緊要中の緊要

事である」と信用=信頼こそ万事の土台になると主張しています。

## 事業の目的は自他相利

信用と信頼を事業の根底に据えた渋沢は「商業の真個の目的」は「自他相利するにある」と述べています。自他相利の他には顧客はもとより取引先、関連企業、地域社会など自己以外のすべてのものが含まれます。「富豪といえど自分だけで儲かった訳ではない。言わば、社会から儲けさせて貰ったようなものである」「だから富を造るという一面には、常に社会的恩誼あるを思い、徳義上の義務として社会に尽くすことを忘れてはならぬ」と強調しています。

現代経営学の教祖ともいわれるピーター・ドラッカーは現在も読み継がれている『マネジメント』の序文で「私は、経営の『社会的責任』について論じた歴史的人物の中で、かの偉大な人物の一人である渋沢栄一の右に出るものを知らない。彼は世界のだれよりも早く、経営の本質は責任にほかならないということを見抜いていた」と絶賛しました。おそらくドラッカーは渋沢の『論語と算盤』を読んでいたのでしょう。

まさに先の見えにくい不透明な時代であるからこそ渋沢の唱えた商いの原点に回帰することが求められているような気がします。とりわけ渋沢は「未来の当事者」である青年たちの活躍に期待しています。

「今後地図の変化に伴う商工業勢力の変化について、適切なる準備と実行の責任とは、未来の当事者にあるのである。しかして、この未来の当事者なるものは、現時の青年を除いて外にない。青年たるものは今日よりして審思熟慮、これに対する策を講ずべきである」

いうまでもなく「未来の当事者」たちの架け橋となるのは多くの経験を積んだ老荘の世代です。渋沢も「青年も大事であるけれども、老年もまた大切である」と語っています。来たるべき未来への「準備と実行の責任」は世代を超えてわれわれすべてに課せられているのでしょう。